

PHD LETTER

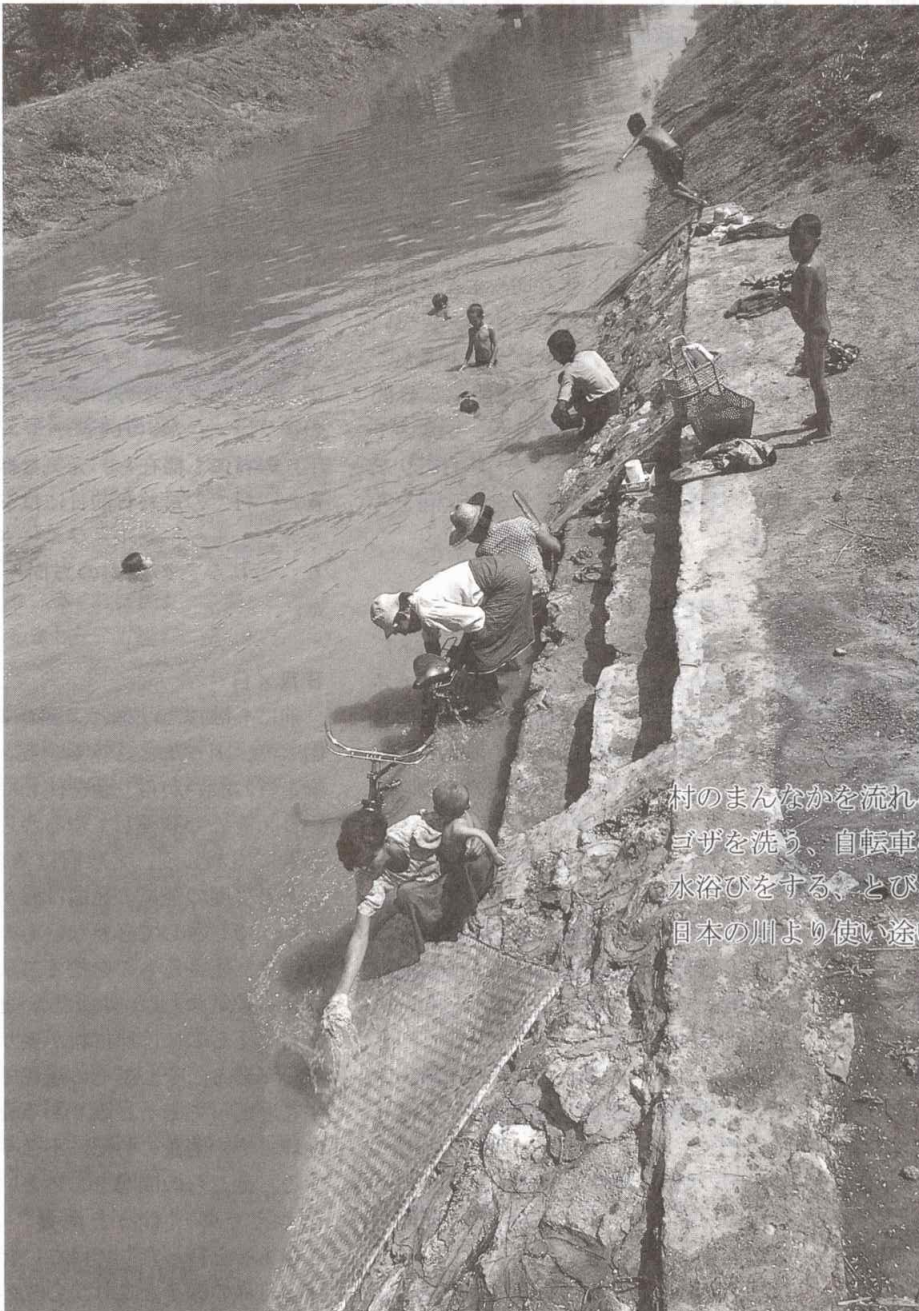
68

PEACE・HEALTH & HUMAN DEVELOPMENT 1998・9

- Working Together For Better Development..... 3 P
- 熱帯雨林の夜は寒かった～PNGツアー報告～..... 6 P

PHD運動とは1962年より約20年間、ネパール、東南アジアを中心とした発展途上国で医療活動に従事した岩村昇博士の提唱による国際社会福祉運動です。これまで自分のためだけに使っていた時間、技能、財などの10パーセントをささげて、平和づくり(Peace)健康づくり(Health)を担う人材をつくる(Human Development)運動を世界中にひろめることを目的として、1981年からはじまりました。

発行：財団法人PHD協会 理事長 今井 鎮雄
編集人：藤野 達也
住所：〒650-0022 神戸市中央区元町通5-4-3
元町アーバンライフ202
TEL (078) 351-4892 FAX (078) 351-4867
定価：100円



村のまんなかを流れる川 ——
ゴザを洗う、自転車を洗う、食器を洗う
水浴びをする、とびこむ
日本の川より使い途いっぱい

ビルマ、マンダレー近郊

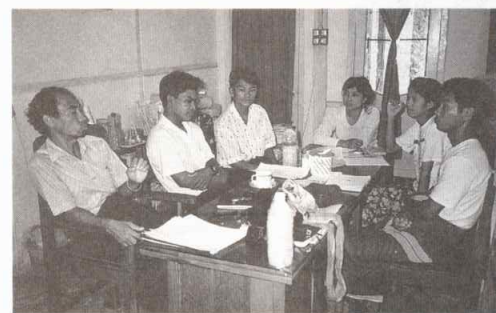
撮影 FUJINO. T

東 西 南 北 問 題 取 組 日 記

6月0日

ビルマ(ミャンマー)に出かけた。この国はひとつの農村に絞って、5人を迎えてきた。

私にとっては初めての訪問なので、空港から町へ向かう途中、タクシーの運転手に「スーチーさんの家の前、通ってくれへん」と頼んでみたら、そこは通行止めになって行けないとのこと。ラングーン(ヤンゴン)でNGOをふたつ訪ねた後、夜行列車でマンダレーへ。PHDは10の国から研修生を招いているが、私たちが村へ泊まることのできない唯一の国がここだ。だから毎日、マンダレーの宿から20km離れた村に通うことになる。92年来日のウィンさんが年長でまとめ役だが、村の中では若いトゥンティンさん(93年)、トゥントゥンさん(94年)が表に出て活動を引っばっている印象だ。保守的な村で村長と対立することもあるようだが、村の若者を中心に教育に重きを置いてグループ活動をすすめている。



左手前からウィンさん、一人おいてトゥントゥンさん、ムームーさん、カインさん、トゥンティンさん

スハルト辞任直後と同じ独裁体制への影響を恐れてか、6月から始まるはずの新学期が小学校から高校までお休みのまま(大学は前から閉鎖中)。難しいこの国の政情を垣間見た思い。

6月△日

初めて公用旅券というものを手にする。PHD協会も加わる関西NGO協議会と国際協力事業団(JICA)大阪センターの共同事業としてこの秋、海外NGO職員向けの村落開発研修コースを計画しているが、その委員の一人としてフィリピンに出かけるためだ。PHDのフィリピンのカウンターパートのひとつであ

るSAFRUDIの本部とその活動現場に他のメンバーを案内する。他にもミンダナオのNGO、IPHICやマニラで政府機関NEDA等も訪問、打合わせ。

ODA(政府開発援助)とNGOの活動の連携の模索が進む中のひとつの試みだ。東京ではいくらか例があるが関西ではこれからだ。今のところPHDが直接、単独で政府と組んで何かをということはないけれど、こういったプロジェクトに加わるから学んでいくことも大切だと思う。

7月0日

イギリスのローレンス・テイラー先生来日。こちらが少し張り切りすぎて超過密スケジュールに。先生ごめん、と思いつつも、そうはない機会だからとあちこちに声をかけた結果、2週間で5日間ワークショップに講演が5回、昼食会1回。PHDにはこんなリソースもあります。ご要望あらばお知らせを。次回を考えます。(詳細は3ページ)

7月0日

地震が起こったというニュースだけ知って、パプアニューギニア・スタディツアーは出発した。村に10日間の滞在。電気はなく、新聞も届かない。そこではアイタペの津波のことを知ることはなかった。レイという町に戻って、大きな被害が出ていることを知った。素人が手ブラで被災地にのりこんでも役に立つとは限らないことは神戸で経験済みだし、600km離れた所までの足の確保もままならない、残された日数もない。ツアーメンバーと相談してカンパを集め、PNGを離れる前日にPNGキリスト教協議会へ手渡してきた。

今回の訪問の目的は帰国した7人の研修生のフォローアップと99年度の研修生の選考も含んでいる。ツアーのグループは2つに分かれ、私は研修指導者組とともにジャングルの村へ。一般参加者は船で海岸から程近い村へ入った。道路が発達していないこの国は、各地にエアストリップと呼ばれる小さな飛行場があり、懐が許せば空路も利用して、あとは歩く。今回は雨期で滑走路がぬかるんで使

えないので、やむをえずヘリコプターを使う。ただしこれも40分だけ。そこから雨の山道を半日歩く。帰国して5カ月のワニさんの村と現在研修中のゲオリさんの村を初めて訪れる。ここは96年の面接時には時間がなくて訪問できなかったところ。

村と村の間が1~2時間、各村2百~3百人といった規模の村がジャングルの中に点在し、焼畑を中心とした農業を行っている。そこでワニさんは同じ土地を耕し、くり返し使う農業を導入している。

そこから、同じく帰国間もないハリエオさんの村へ。村の中で自信に満ちた彼がとても頼もしく映った。次期研修生の人選はこの村で行い、4人の候補の中から隣村ウルオに住むアキガオさんに決定。ハリエオさんの相棒的存在の人。この後ラニーさん(91年)、レルさん(90年)の村にも滞在し、元気な様子を見てきた。村での最終日前日にはワニ、ハリエオ、ヘルペ、レル、ラニーさんが集まり、これからの協力の方向を打合わせた。

8月×日

前にも触れたけれど、世の中不景気で困った、困ったと言っている。みんなが物を買わないから、金を使わないからという。そこで減税してやるからその分を消費にまわして、と政府は考えてる。

ある程度の経済の発展は確かに要るだろう。でもさして必要ないものを買ったり、まだ使えるものを捨てて次を買って支える景気ならば、おかしいと思う。モノをつくるには原材料が要り、エネルギーが要る。そしてその過程で環境を汚すことだってある。限りある資源に狭い地球。その消費の分配に不公平さだってある。そこらの問題をおいといて今だけを考えての“もっと消費”ならば、“ちょっと待った”ではないだろうか。今の世界の様子とこれから先のことを考えての節度ある消費。逆にそれでやっつけける世の中にしていかなければあかんのでは。ところで、NGOへの寄附は景気にはどう影響するのだろうか？

総主事代行 藤野 達也

Working Together For Better Development

ローレンス・テイラー先生と考える

PHD協会が取り組んでいる大きなテーマ『開発』。国際協力の原点といえる課題、開発とは何か、開発協力のあり方、すすめ方、評価のしかたなどについて考えるため、英国バーミンガム市のセリー・オーク大学からローレンス・テイラー先生を招きました。

7月8日から12日は兵庫県国際交流プラザと神戸学生青年センターを会場に5日間ワークショップ“Working Together For Better Development”7月14日から17日までは、関西NGO協議会例会、顕栄人間福祉専門学校公開講座、兵庫県国際交流協会セミナー、名古屋大学大学院国際開発研究科、神戸大学大学院国際協力研究科での講演に加え、関西学院大学での昼食会。

開催にご協力をいただいた皆様に厚くお礼申し上げます。

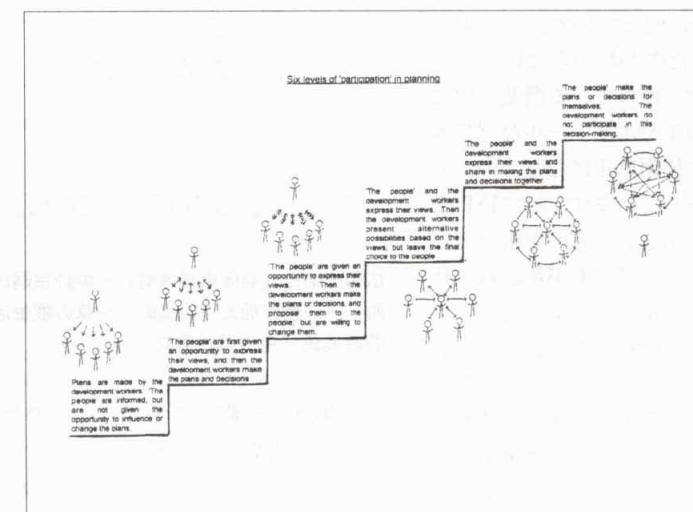
ワークショップの中から特に印象に残ったいくつかのセッションをご紹介します。

<計画への参加のしかた>

物事を計画する時にリーダーとその他の人々(例えば村の人)がどういった関係でそれを進めていくかということを下図を見ながら学びました。

左から右へいくほど村の人たちが意見を言い積極的に計画に参加していくことを表しています。日常生活においても、開発の現場においても自分自身がどちらの立場にもなりうるし、この研修を受けながら色々な場面が頭に浮かびました。

例えば、事務所で職員とボランティアでプログラムの企画をしている時、村に



帰った研修生が村の人と活動していく時など、応用できる部分はとても多いと思いました。

<積み木の作業>

これは、二人ずつのペアで、片方の人が目隠しをして、もう一人の人が手助けをして積み木を積んでいくというゲームです。援助する側とされる側との設定なのですが、多くの人は目からウロコが落ちるような感じだそうです。自分が無意識のうちに相手を依存させていることに気付く反省することしきりでした。また、実際に積み木を積むということに気が取られ過ぎて相手の気持ちを考えることができていなかった人も多かったようです。

非常に簡単なゲームですが、国際協力の現場で、また、日常生活におきかえて色々なことを考えさせられるものでした。

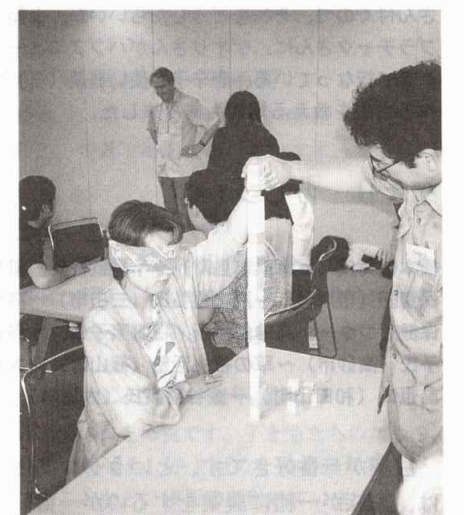
<チェックリスト>

事業を計画する時の一つの方法としてチェックリストというものを習いました。これは、何かを計画するときにはWHAT, WHO, HOW, WHEN, WHYと問いかけて行うと良いというものです。つまり、いつ誰とどんなふうに行うのか、そして一体それは何のためにするのか、常に確認する必要があるということ。

日々の忙しさについて目の前のことをするのに精いっぱいになっていることが多いけれど、常に目的を明確にして仕事を

していくことの大切さを改めて認識させられました。毎日、毎日先生が繰り返しておっしゃっていたことは、開発ということに関しては答えは一つではないということでした。援助は、相手の立場に立ち、長

期的な視野を持って行わなければ、(それが外の人の持ち込んだものである場合特に)害にもなりえるし、決して独りよ



積み木のゲームに熱中する参加者

がりになってはならない。まずは自分で考えなさい、人の意見に耳を傾けなさいという先生の言葉が耳に残っています。

また、先生は、家で、職場で常に自分に問いかけることを実践なさっているそうです。例えば、暑いときにエアコンの前に行くと、「本当にエアコンは必要なんだろうか、まずは、ジャケットを脱ぐべきなのでは?」とか「ネクタイは必要なのでは?」「いや、職場ではネクタイは必要だ、じゃあ、職場でネクタイをすることは本当に必要なんだろうか」というふうにか何か他の方法に差し替え、単に便利で快適な生活を甘受しないようになさっているというお話に、私たちも見習わないといけないなあ、と思いました。私たちは、自分で考え、また、みんなで意見を交換し合うことの中からも、非常に多くのものを学んだ5日間でした。

参加者からも、早速職場でゲームをやってみた、評価の方法、参加型の計画は使えそう、などの意見が寄せられました。

職員は、研修ということで、5日間参加させていただきました。学んだことを現場で生かし、少しずつ皆さんにご報告することができればと思います。

研修生レポート

16期生

来日から4ヵ月。日本での生活にも慣れ16期生は元気に研修を続けています。

8月初旬には、4人揃って2ヵ月間の研修のふりかえりをしましたが、4人はそれぞれ、お互いの研修の内容をメモを取りながら熱心にやり取りをしました。農業は身体に悪いけれど、虫がたくさん付くので、それをどうしたらいいか、と話すプラチャクさんに、ゲオリさんがパプアニューギニアで行なっている、唐辛子を使い農薬(?)を作る方法を教える場面もありました。

ゲオリ・カピンさん

パプアニューギニア

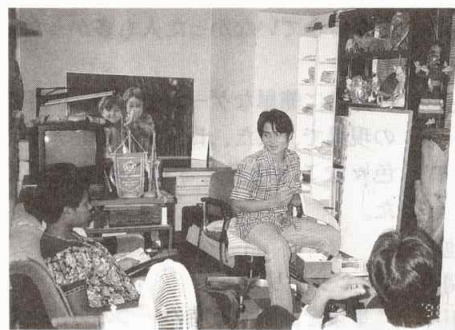
橋本慎司氏(兵庫県市島町)～牛尾武博氏、瀬加保育園(市川町)～戸出善弘氏(三田市)～高砂保健センター、高砂保健所/樋野素子氏、水野道子氏(高砂市)～草の根生活塾(篠山町)～大森昌也氏(和田山町)～金谷昌高氏(大屋町)

農業が一番好きです、というゲオリさんは、家族と一緒に農業をするのが一番いいと話しています。有機農業については、パプアニューギニアで研修を受け、実践も始めているので、堆肥の作り方、輪作、混作など色々な技術、考え方についても一つ一つ改めて確認しながら、学んでいます。

ゲオリさんの研修は、農業と保健衛生を半々で行なっています。栄養のことを学ぶと不足している食品が出てきますが、それを補うために、スーパーに出かけて買うというわけにはいかない村では、まずそれを栽培することが必要になります。その点、農業も学ぶゲオリさんには、両面から必要がよく見えてくるのではないのでしょうか。

7月に入り、初めて保健センターでの研修を行いました。その中では特に栄養について学んだことが印象に残っています。様々な栄養素の中で、ゲオリさんの村では、肉、魚、乳製品の類を口にすることは

多くありません。けれども、豆類やアイベカ(パプアニューギニアの伝統的な野菜で栄養が豊富、日本にある野菜の中ではモロヘイヤと食味は似ている)を多く食べるので、栄養バランスは良いようです。ゲオリさんは、パプアニューギニアでは、その価値を十分に理解していないと言います。自分たちの食生活のバランスがとれていることがよく分かったので、帰ったらお母さん達に話して、今の食生活を大切にしたいと話しています。ゲオリさん曰く「日本のママは(栄養や衛生について)保健所等での講習を通じて)よく勉強しているのでいいですね。」



事務所研修のまとめをする16期生(中央プラチャクさん)

プラチャク・ムアンチャンさん

タイ

藤井誠次氏(神戸市)～渋谷富喜男氏(神戸市)～原重男氏(兵庫県丹南町)～原田富生氏(大阪府能勢町)～草の根生活塾～真柴三幸氏、淵上文徳氏/波多野豪氏(兵庫県南光町)～田中五郎氏(波賀町)

プラチャクさんの村では、農薬、化学肥料が普及していて、プラチャクさんが農業を始めた頃には既に使っていて、いつ頃から使うようになったのかわからないということです。使っている農薬の中には、DDTやホリドールなど日本では既に使用禁止になっているものも含まれています。特にDDTは、殺虫剤として家の屋根などにも撒くので、子どもがかぶれたりすることもよくあるようです。また、農薬を撒布したあとに気分が悪くなることもあるそうで、それらを使用する上での注意、情報も不十分なようです。プラチャクさんが研修するのは、有機農業をし

ている農家を中心です。そこで、農薬、化学肥料に頼らない農業を見て、これを覚えて帰りたいと張り切っています。農薬を使わないで農業をするためには、まず、化学肥料の使用をやめること、という農家のお父さんの言葉にプラチャクさんは、堆肥の作り方を一生懸命学びました。また、色々な野菜をローテーションを組んで作っていく輪作についても学びました。これを実践すれば、今はあまり作っていない自家用の野菜も色々作るようになりいいのではないかと話しています。

『農薬、化学肥料を使用しない』と一口に言ってもそれを実践するのは、並大抵のことではありません。田んぼには水が溜りにくく、雑草がとても多いこと、十分な堆肥を作るための労力や、そのためには家畜を増やすことが必要なことなど、色々困難なことがあります。また苦勞して作っても、無農薬ということで評価されることはありません。けれども、プラチャクさんは、農業は農業をしている人の身体にも悪いからやめたほうがいい、そのために色々勉強したい、と話しています。



プラチャクさんの研修ノートより

サワン・ナンタボーリスさん

タイ

広岡史郎氏(兵庫県福崎町)～中野宗嗣氏(春日町)～色作郎氏(市島町)～草の根生活塾～笹間政典氏(鳥取県日野町)

今年度の研修生の中で最年長のサワンさんは、一番真面目で熱心ですが、年令のせいもあるのか日本語の習得は遅れがちで

す。今は、なかなか研修の内容について聞き出すことができません。けれども、とても努力をしているので、そのうち色々報告が聞けると期待しています。



中野さんの畑で野菜を学ぶサワンさん

以下は、6月にお世話になった中野宗嗣さんが、サワンさんの研修ノートに書いて下さった文章です。

多くの研修生を受け入れさせてもらったが、相性もあると思うが、最高に感じのいい研修生であった。ひととき、一回としていやな顔をした事がなかった。いつも素直に、よく働き、学んでくれた。

日本語を早く覚えたいという気持ちがいやという程こちら側に伝わり、そのひたむきさに心打たれた。

来年3月までの研修期間中、大いに成長するだろう。

今迄のすばらしい研修生幾人かと共にタイのサワンさんも恐らく生涯忘れられない1人となる。末長い交流としてゆきたい。出会いを感謝して彼の前途にエールを送りたい。

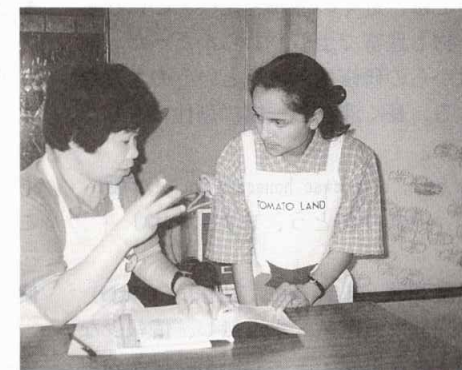
サビトリ・バストーラさん

ネパール

太陽保育園、和田山保健所/岸政次郎氏(兵庫県八鹿町、和田山町)～三木市健康課、三木保健所、高橋武子氏/芝美代子氏、山口久則氏、吉田知子氏、三木市国際交流協会(三木市)～篠山町健康課、篠山町社会福祉協議会、訪問看護ステーション、ささやま保育園/岩下富子氏、田中恵子氏、河南すみ江氏、北村由美氏、谷田治氏(篠山町)～吉田淑子氏/臨三映氏、矢野正史氏(西宮市)～草の根生活塾

サビトリさんの研修テーマは、保健衛生、栄養に加えて、編み物、洋裁です。まず、研修の前半では、保健、栄養について中心に学んでいます。基本的な知識は理解できたことから、後半は、それを深めていくことと、編み物、洋裁の技術の習得がテーマになります。

サビトリさんは、ラダ・バンストーラさん(83年度)が作った編み物のグループの推薦で来日しています。8月に職員がボカラを訪ね、改めて、ラダさん、昨年度の研修生サビトリ・シュレスタさんと一緒に、サビトリ・バストーラさんの研修について話し合いました。ラダさんからは、まず本人が何を学びたいのかを大切にしたい、洋裁をベースに活動を広げたいと考えているので洋裁を学ぶのも良いと思うと聞きました。そして、簡単なものだけを学ぶのではなく、流行にも対応していけるようなものも学べば、現金収入につなげていくこともできるのではないかと、という意見が出ました。



栄養士さんからお話をまきサビトリさん

今後は、洋裁の研修に時間をさいていきますが、彼女が洋裁については、初心者に近いこと、彼女自身が、簡単なものが上手にできたらお母さんは服を買わなくてもいいし、自分の子どもの服を作れるようになったら楽しいと思うと話していることから、当面は家族のための洋裁をテーマに研修を進めていきます。

帰国研修生短信

<タイ>

アンボンさん(97年度)

帰国直後の4月に、7才年下のディーさんと結婚しました。山の村で農業をしています。

<ビルマ>

ウィンさん(92年度)

ビルマでは現在、保健関係に限って、外国のNGOが活動を許されています。そんな中でケアオーストラリアのスタッフとして働いていて、マングレー、ヤンゴンを拠点に活動しています。

トゥンティンさん(93年度)

循環農業に取り組んでいます。農薬、化学肥料を減らし、牛糞で堆肥を作っています。

ムームーさん(93年度)

保育園の先生と編み物のグループを続けています。グループは5人で始めましたが、今は15人に増えています。

トゥントウンさん(94年度)

村の若手のまとめ役です。子どもたちのための塾、若者の勉強会、子どものための奨学金のグループのことなど、積極的に動いています。

カインさん(96年度)

のんびりとしたカインさんですが、家の農業を手伝いながら、洋裁を教えています。

<パプアニューギニア>

ヘルペさん(90年度)

ルーテル教会の企業部門である製材会社で働いています。森林を破壊しない林業を目指しています。

レルさん(90年度)

ワリンガイ村で農業を続けています。真面目なレルさんは、農場を発展、拡大するために色々と考えています。

ラニーさん(91年度)

洋裁のグループを8人のメンバーで継続しています。近所に住んでいるアンビさんという女性とのコンビで頑張っています。

ハリエオさん(97年度)

帰国後4ヵ月。色々なものを植えた立派な畑を披露してくれました。村の人からも慕われて、今後が期待されます。

ワニさん(97年度)

日本での研修中に家畜のほとんどが死んでしまったにもかかわらず、立派な畑を見せてくれました。家の隣にみんなで集まれる農業センターを作る計画をしています。



「いろいろ作ります、いろいろ食べます、元気です。」ゲオリ(牛尾宅にて)

『熱帯雨林の夜は寒かった』 第3回Papua New Guineaツアー報告 7月18日～8月2日

2年ぶりのPNG ツアー。今回は兵庫県三木市から教職員等海外派遣使節団6人を含む総勢14人の大所帯となりました。

サザンクロス空の下で

大下 幸子(兵庫県小野市・教員)
大きく輝く黒い瞳、素足で走りまわると子供達。こもれ目で目を覚ます朝、一番鶏の声、体からほとぼしる歌と踊り、たき火を囲んでの夜の団らん。日本で久しく忘れていたものがここにあった。

ワニさんの村への道はキツイ

曾我 一作(兵庫県日高町・教員・研修指導者)
細い山道、急傾斜赤土の登り下り、ロープ一本のつり橋、川の中をすすみ大雨。そして6時間。山の村は寒かった。そして、海の村は暑かった。すべての季節を味わわせてくれた緑のパラダイス。旅人には、すべてパラダイス。しかし、村の人は電気・道路を望む。

あつかましい願いであるが、自然との共生を私達との分かちあいで創れたら。

ダンゲ・ソガ

渡辺 朋子(東京都・高校生)
今回のメンバーの中に大人でも私をうわまわる変わり者、もしくは国籍不明の方がいることを発見しました。そして、私の人生は大幅に変わりました。

がんばれ研修生

平尾 栄治(神戸市・農業技術センター職員・研修指導者)
熱帯雨林気候の中で、日本での農業研修の成果が着実に生かされつつあることをワニさん、ハリエオさんの村の畑で感じました。

水色の海 勝部 浩子(三木市・教員)
ワンドカイ村、ワリンガイ村で泳いだ海、水色から青への3段階に変わる海、今まで見たこともない美しい海を泳げた幸せ!

なつかしさと・・・

白井 秀幸(三木市・市職員)
素朴な村の人達に会って、幼かった頃の思い出が蘇ってきました。でも後半は体調を崩してしまい、便利な生活に慣れ



左からヘルベさん、ラニーさん、アキガオさん、ワニさん、ハリエオさん、レルさん

てしまった自分を感じました。

ワニさんの畑

高坂 紀子(鹿児島県高尾野町・農業・研修指導者)
そこは、近くの焼畑と比べものにならず作物も豊富で土もやわらかかった。他の村からの研修生が来るというのうなずける。長く滞在し一緒に畑仕事をしたかった。

Dange sako, no mocwac honecgazepac. (コテ語)
(ありがと、またおね)

満足度200%

西台 利正(三木市・市職員)
出国前は、電気・水道無し、情報少ないで、少々不安・・・しかし、村々の生活は、底抜けに明るい、親切な人達ばかりで感動、感動の毎日でした。生きる力

を実感しました。

発見

西口 愛(神戸市・教員)
川で水浴びしたり、洗たくしたりすることって、実はとても気持ち良いことだったんですね。子ども達はとても楽しそうにおなべを洗っていました。私まで楽しくなるようなとても幸せなひとときでした。

村の学校を訪ねて

中川 典也(三木市・教員)
小学校の校舎は、あちこち壊れ、中は大変暗い。大雨で床には雨水がたまっている。でも、子どもたちの目は輝き真剣だ。その裏には一生懸命働いて、子どもたちを送り出している親の姿が見える。

眼鏡ごしに見えるもの

寒者 将司(三木市・専門学校生)
ここは、緑(植物)が多い。これほど多いと、目が良い人がたくさんいることがあたりまえのように実感できる。

もっと話せたら

林 知江(京都市・看護学校生)
英語ができない私にとって、しゃべりたくてもしゃべれないもどかしさがたくさんあったけど、コテ語を覚えてフレンドリーになれたし、言葉なく通じあえたこともあったかもしれない。

使ったフィルム60本

長戸 基(三木市・教員)
初めての海外。村の人達とかわす「アピヌーン」。雨にぬれた移動も、今は楽しい思い出です。

今年もいってきました！草の根生活塾

8月7日～9日 場所：たんば農文塾(多紀郡篠山町)
協力：篠山町教育委員会、篠山町・丹南町・春日町農家有志
プログラムは毎年恒例の鶏しめ、農業体験、わら細工などに加え、今年は篠山町立村雲小学校で子供たちとともに希少淡水魚の保護に取り組み環境問題を考へておられる酒井先生、但馬農業高校の曾我先生においでいただき、環境と農業を考える交流会を行いました。お二人の実践からのお話に、「農業・環境」というと特別なもののように思いがちだが私たちの生活に密着しているものだと感じることができた」などの感想を聞くことができました。

第8期林業体験合宿「枝打」～下草刈り～

7月4～5日 場所：多紀郡丹南町大山
共催：(財)大山振興会、協力：篠山林業事務所、丹南町四季の森会館
今回の枝打は男女総勢14名の参加者を得て、賑やかに終わりました。初日には篠山林業事務所の河井さんのご指導の下、森林観察を行い、夜には林業についての学習会も催しました。参加者からは積極的な質問が飛び出し、森林の機能や日本林業の現状についての理解が深まったように思います。
二日目には大山地区の共同下草刈りに参加しました。前日の雨のおかげで涼しさが残る朝から作業を始めたのですが、終わるころには汗がびしょりです。しかし休憩のときに斜面から下を見下ると、こうした努力が森林の保水力や保土力を支えているのだという実感と、何とも言えない達成感がこみ上げてきました。参加者の皆さんから秋の「枝打」も是非参加したいとお声をいただけてとてもうれしく思いました。
「枝打」は11月にも予定しています。(詳細は未定)お問合わせ下さい。

これらのプログラムにご協力下さった皆様、本当にありがとうございました。

終わってから始まる旅 ～スタディツアーのその後あれこれ～

日本での1年の研修のあと、研修生が帰ったところを元気で頑張っているか、どんな地域か、どんな活動をしているのか、と彼らを訪ねていくフォローアップ&スタディツアーを毎年夏冬に数本、行っています。

その中でも毎年のように恒例になっているものとして、インドネシア、スマトラへのツアー、タイへのツアーがあります。

継続して出かけること10数回、なかでも継続して参加して下さる方がいるツアーは日本からの参加者同士も年度を越えて付き合い、交流する機会ができてきています。

5月2日、伊豆の漁師、山本佐一郎さんの提案で、インドネシアツアー同窓会が神戸市で行われました。古い人は10年前の参加者から、昨年度の参加者までの

20人ほどが集まり、スライドで懐かしい風景を見、研修生の結婚式の写真を見、今では様子も随分と変わっているよ、と意見を交換しあいました。

ご馳走の出た会だったのですが、なかには飲み食いは節約してその分活動に寄附するほうがいいのでは・・・と家族から言われたという声も聞かれました。

5月9日には、ここ数年のタイツアー参加者などがこちらも20人ほど集まり交流のひとときを持ちました。こちらは、毎年のようにタイツアーに参加している兵庫県波賀町の農業研修指導者、田中五郎さんが招いていたシラニー・ワッターナーさんを囲む会です。シラニーさんはPHDの研修生ではありませんが、タイツアー参加者が毎年のようにその道中でお世話になっていて、顔の見えている人です。村との連絡役を担ってもらえた

ら、という願いも込めて、特に布のグループ「ソディ」との関わりの中で、『国際協力ワークショップ』などで布織りの実演を入れるなど交流の機会を作ったり、委託で布を置いている店に出かけたり、ソディの例会で村の状況を報告したりしてくれました。

長年の研修生を通しての交流が、今までになかった新しい交流を作りだしています。交流の方法も、さまざま。村の人と私たち、あるいは自分たちと周りの人たち。今までの日常では、得られなかった出会い・経験が広がって、そこからまた別の新しいものにつながっていくのではないのでしょうか。

終わっても終わらないのがPHDの旅。今年もそんな旅を用意しています。ぜひ、あなたも体験してみませんか。

〇月×日のPHD協会

「夏のイベント、ツアー特集」

職員 小松 ネパールへツアーを引率。ほぼ毎日雨が降る雨期にもかかわらず1泊だけのボカラではヒマラヤの山並みを見ることができ、クンタ村ではしっかり日焼けも。日頃の心がけがここにでた?

職員 伊藤 草生塾のイベント、PNGのムームー料理用に使うバナナの葉入手のため布引ハーブ園に。急な雷雨に見舞われ停電でロープウェイ停止。1時間山で足止め。日頃の心がけがここででた?

職員 谷 上記バナナの葉を使う野外料理を予定するも朝からの雨でやむなく中止に。せっかく手配の葉っぱの有効活用はお皿。南国情緒たっぷりのランチに。

職員 藤野 PNGのジャングルの移動2日でヘトヘト。上からの豪雨、下からは谷川の水、そしてふき出す汗でカッパもカサも意味なし。靴はこわれ、足もつりそう。村の人は荷物担いで裸足で、3倍は早いぞ。

職員 田中 今、神戸で雨といえばこの人。春のハイキング中止。草生塾の下見、雨。草生塾本番も雨。雨水もしたたるナントカとか。雨が必要なときには一声かけて。

(汗っかきの順 推定)

PHD NEWS

□会費・ご寄附寄託状況

1998年 5月	60件	1,231,768円
6月	218件	1,965,325円
7月	562件	5,385,499円
合計	840件	8,582,592円

以上の通り、多くの皆様より会費とご寄附を頂戴いたしました。ご協力に厚くお礼申し上げます。

□新しく事務局長が就任します

何かと多忙なPHD協会の運営の事務部門をまとめていただくため山西一平さんに事務局長として仕事をさせていただくことになりました。10月からフルタイムで事務局に来ていただきます。長らく大阪府青少年活動財団で活躍された経験を生かして、PHDを支えていただきます。

□冬の定番ツアーは北タイ、さらに年明けツアーも

帰国した研修生はその後どうしてるの。アジアの村の生活を体験したい、そんなご希望に応えるPHDの旅。冬はタイともうひとつ出かけます。お早目にお申し込みを。

・タイ
98年12月23日(水)～99年1月2日(土)
北タイ、チェンマイ県、メーホンソン県のカレンの村を訪ねます。
費用約19万。

・ビルマ、スリランカあたりで調整中
99年1月4日(月)～11日(月)前後

□今年も出かれます、東日本研修旅行

研修生のリーダーシップトレーニング、社会学習を目的とした研修旅行に今年も出かれます。各地で交流会を予定していますので、近隣の方にはまた、ご案内をお送りします。
時期：11月20日～30日頃
コース：愛知-岐阜-長野-山梨-東京-神奈川-福井

□第12期NGO大学、9月開講

今やこの手の講座の老舗ともなった関西NGO協議会主催の国際理解・国際協力入門講座「関西NGO大学」。今年も9月から翌2月まで毎月1回、1泊2日で行われます。今期のテーマは「国際協力と毎日の生活」。当会藤野も運営に参画。全6回参加者優先。受講料2万5千円別途宿泊・食事代が必要。定員50名。問合わせ・申込みは下記へ
関西NGO大学事務局
電話/FAX 06-377-5144
竹安さんまで

□パプアニューギニア

干ばつ・飢饉緊急救援のご報告
前号でご案内した標記呼びかけにお応え下さり、ありがとうございました。その額60万円となり、スタディツアーに行った際(8月1日)、PNGの首都ポートモレスビーのPNG教会協議会のレバ・キラ・バット牧師に届けました。またこの直前に起きたアイタベでの津波の被害に対し、引き続きのご協力を募っています。

阪神大震災地元NGO救援連絡会議
郵便振替 00970-7-39728
※通信欄に「PNG津波」とお書き下さい。



編集後記

もし、救助隊のリーダー
だったら？もし、途上国を旅
するツアーの一員だったら？

もし、チョコレート工場の工員だったら？

もし、PHD協会の職員だったら？

ワークショップは「もし、何々だったら？」
からスタートします。

私がワークショップに参加して「もし」を考

える時、自分の人生経験や価値観をもとに、
「もし」を考えているということがよくわかり
ました。

国際協力や国際理解を考える時、とても大き
なテーマで、どこをどう考えてみたらいいのか
と悩んでしまうけれど、その土地に暮らす人々
を身近に感じて、その人々の本当の姿、考え方
を理解することが、私のスタートかなと思っ
たりします。

私が思うに「入門・国際協力ワークショッ
プ」は、主催者が用意した「知恵の輪」をいろ
いろな参加者が協力して解いていくゲームみた

いなものです。

「すばっ」と解けると気持ちがいいが、「知
恵の輪」が解けなくても、その場に参加した人
達と協力した時間が有意義で、いろいろなこと
に気付いて、そこからいろいろなことが発展し
ていくのが楽しさかもしれません。

まだ、ワークショップを体験していない方、
あなた自身の「いろいろなこと」を見つけて楽
しんでみませんか？

石川

編集メンバー：石川透、井上由美江、岩脇章能
円城啓彰、小石陽子、重田珠樹、
西村菜穂子、野口優子、宮坂淳子

新規会員・寄付者ご芳名は、
個人情報保護のため
掲載しておりません。